

目的 近世被服構成技法研究においては、元禄3年板の『裁物秘伝抄』をはじめとして、嘉永4年板の『裁物早学問』にいたる裁本が存在し、貴重な文献史料となつてゐる。出版年代によつて内容に変異があるが、いづれも専門仕立取人や裁縫師匠などが用いたものと考えられる。本報では女子用往來物といわれる、女訓・女大学・女今川などについて、被服構成技法とその周辺に視点をあてて検討し、当時の実像をとらえようとした。

方法 史料としては大江文庫所蔵の江戸時代の家事・家政関係、家庭教育関係の往來物を主とし、参考史料として上記裁本を用いて研究を試みた。

結果 1. 単行本としての被服往來は少なく、ほとんどが首書や頭書に収められている。2. 一般庶民の女子教育に主眼がおかれた家庭百科・家庭全書的性格から、広く被服全般にわたつて叙述されているが、被服構成技法としては裁断法が主要部分を占めており、この点は裁本と類似している。3. 採用品目については日常必要度の高い産着や一つ身・中裁と大裁長着・羽織などが主である。4. 技法的には基本的で平易な裁断法がとりあげられ、これらが家庭裁縫を担当した当時の女性の間で一般に行われたものと思われる。5. 縫製技術に於ては触れることが少なく、他の芸道の修得と同様に、口伝・示範による伝習であつた。以上、この時代の一般家庭の女子は裁ち縫いの手わざを身につけることが第一の婦功とされたが、これら往來物の被服構成技法における教育史的役割が位置づけられたので報告する。